

群馬県、公益財団法人特別区協議会、特別区職員研修所 共催
群馬県内市町村と東京23区との交流を目指した自治体間交流セミナー
～今だからこそ取り組みたい自治体同士の関係づくり～

開催日時：平成25年10月17日(木)14:00～16:00

開催場所：東京区政会館3階

「地域力を高め、職員を成長させる自治体間交流のすすめ」

早稲田大学教授 宮口 侗迪（としみち） 氏

私は地理学の分野で育った人間です。富山県の山村に育って、東京の学校へ来たものですから、田舎と都会との違いがずっと気になって、過疎問題がクローズアップされる中で、田舎はどういう姿勢で生きていくべきかということをやっと語ってきました。今日は、東京の特別区職員と群馬県内の市町村職員が一堂に会して学び合うセミナーということで、大変意義のある催しだと思っています。

地理学は何かというと、「世の中いろいろ」ということです。自然はもともと違っているわけですが、人間は様々な地域を作り上げてきました。農村のままの地域もあれば、人口が減少している過疎地域もあります。一方で、ある時代に都市が生まれ、それが成長して大都市になっている地域もあります。東京大都市圏のような人口や電車により時刻通りに人々が移動できる都市は世界にもあまり例がありません。

交流というのは、そもそも違った世界と付き合うことを言うもので、内輪同士で楽しくすることを交流とは言いません。内輪の付き合いというのは、多くの言葉を必要としません。日本人は、理屈っぽく長々話すことがもともと得意ではありません。話さなくても分かるという文化が、日本の、特に田舎で育っていました。知らない人と話すのは長々と話す必要があり面倒なので、内輪以外の人との付き合いが下手というのも日本人の特徴です。

しかし、分かりあっている者同士の付き合いでは、頭もあまり働きません。刺激がない、進歩・成長が生まれにくいということです。

違う世界との付き合いでは、片方では当たり前なのが、もう片方では驚きや感動の対象になるということがあります。また、きちんとした説明を必要とすることは、頭を使い、成長を喚起します。つまり、人間は、交流によって新たな成長をするということです。

成長を喚起する交流のひとつに、自治体間交流があります。私は、東京の区役所に勤める人と群馬県の山村地域にある役場に勤める人と人事交流をしてみてもどうかと思います。システムも違えば、話の伝わり方も違います。単に、進んでいる・遅れているという違いではありません。物事の本質的な違いが、かなりあるということです。

私は、日本は高度成長期に3つのタイプに分化したと考えています。東京のような大都市、県庁所在地とその周辺、遠隔農山村の3つです。県庁所在地に近ければ、見かけが農村と似ていても、県庁所在地に住むのと生活スタイルは変わりません。これらの中で最も大きな違いがあるのは、大都市と県庁所在地等から遠い遠隔農山村です。

群馬県、公益財団法人特別区協議会、特別区職員研修所 共催
群馬県内市町村と東京23区との交流を目指した自治体間交流セミナー
～今だからこそ取り組みたい自治体同士の関係づくり～

かつて、都市と農山村は、それぞれ異なる魅力と価値を持っていました。しかし、20世紀に入り、都市中心のシステムに世の中が変えられていく中で、「違い」は「格差」になっていきました。人々は、人口や都心からの距離を地域の価値をはかる物差しとして考えるようになりました。私は、21世紀は、「違い」を「価値」に変える時代でなくてはならないと考えています。

東京には大企業のオフィスがぎっしり詰まっっていて、人々は時間をかけ公共交通で通勤しています。この背景には、日本人の「ものわりの良さ」がありますが、都市は、巨大な人口が移動できるシステムをつくり、必要に応じてこれを刷新してきました。

こうした都市の素晴らしさは、「新潟県が地震の被害にあった時に防災協定を結んでいる東京都狛江市が徹夜で会議を開いて支援した」というように、経験のないことに対しても、ルールどおり進める点が挙げられます。これは普遍的価値だと思います。

一方、遠隔農山村の本質的価値は、長い年月をかけ、そこに住む人々が自然を扱う「ワザ」を身に付けたとことにあります。自然を扱う「ワザ」が磨かれていれば、都市の人は素直に感動することができるのです。

かつて、交流というと、農山村は行政を中心として、都会に向けて一方的なサービスをするイベントを行っていました。しかし、現在では、子ども農山漁村交流プロジェクトのように、田舎を売りにした良い形のイベントが行われています。これは、他人に感動してもらえる田舎になろうと人々が努力を重ねてきた成果だと思います。

都市と農山村の自治体職員は、お互いの持つ地域の価値を学び合い、その上で自らの価値を主張し合えるようにはいけません。特別区職員が田舎の行政のシステムに学び、あるいは、指摘し合うということが大事です。地域は千差万別ですが、独りよがりではいけません。個性は、他人に認められる「個性」でなければいけません。地域の個性を他人に認められる「個性」とするために、自治体職員は、都市と農山村双方の価値を知り、何をどのように提供するのが良いのかを考えることが必要です。地域の個性やパワーは、人の数だけではなく、そこにある付き合いの濃さ、そして個性的な「ワザ」にあると思います。現在、田舎では、今までの「ワザ」を活かした新しい取組みが生まれています。こうした取組みは都会の人との交流により生まれてきました。交流によりお互いが鍛えられ、地域力も高まります。また、交流の矢面に立たされる職員は苦勞しますが、成長することができます。自治体間交流には、こうした意義があるのです。